

「考え、対話する道徳」でモラル・アクティブ・ラーナーを育てる ープロジェクト型総合単元的道徳学習の充実ー

武庫川女子大学 押谷由夫

「道徳教育は大切だ」とだれもが言います。でも、「よく分からない」とも言います。ベストセラーとなる本を見ていると、定期的に生き方に関わるものがよく売れています。

人々はいろんな経験をします。その中で自分の生き方に悩んだりつまずいたりします。でも、生きねばなりません。どうすればよいのか。そこでいろんな知恵を学ぼうとします。そのよりどころが道徳的価値意識です。立ち直ろう、よりよく生きようとする心をもつこと自体が、道徳的価値意識なのです。

しかし、いま確たる方針がもてたと思っても、また自信を失います。そこでまた、自分を見つめなおしてよりよい生き方を見つけようとしています。道徳教育に完成はないのです。その時々で考えなければなりません。だから難しいのですが、その根幹にある道徳的価値意識を養うのが、学校における道徳教育なのです。

その道徳教育をどのように充実させればよいのか。これから取り組もうとしている道徳教育を、モラル・アクティブ・ラーナーを育てるモラル・アクティブ・ラーニングという視点から考えてみます。

1 モラル・アクティブ・ラーニングとは何か

(1) アクティブ・ラーニングについて

アクティブ・ラーニングとは、「主体的・協働的学び」であり、「主体的・対話的で深い学び」であるとされます。次期学習指導要領の改訂方針について審議する中央教育審議会において、提案されてきたものです。文部科学省が主張してきた主体的な学びの延長にあるといえます。平成20年の学習指導要領改訂の基本方針を示した中央教育審議会答申において提案されたのが、「習得・活用・探究」の学習でした。子どもたちが、「基礎的・基本的な知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」は身に付けていくためには、「習得・活用・探究」の学習活動が大切だとしたのです。

つまり、アクティブ・ラーニングとは、「習得・活用・探究」の学習プロセスを基本にして、特に問題発見・解決を念頭に置いた、「対話的学び」「主体的学び」「深い学び」を求めるものであるといえます。

このような方法は、当然に目的や評価と連動しています。アクティブ・ラーニングは、目的と方法と評価を一体的にとらえることによって、これからの教育改革の目玉となっていくととらえられます。

（２）育成すべき資質能力の「３つの柱」と道德教育

今回の学習指導要領改訂にかかわる中教審の答申では、これからの学校教育で育成すべき資質・能力について「３つの柱」を示しています。第１は、「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」。第２は、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」。第３は、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」です。

知識や技能は、身に付け、生かしていくことが大切ですが、「どのように生かすか」と同時に、「何のために生かすのか」を押さえる必要があります。言うまでもなく、より幸せな生き方とよりよい集団や社会を目指してです。それは、道德性の育成によって可能となります。よりよいものを求めるという価値志向の根幹に道德性があるからです。従って、「３つの柱」の育成において、道德教育がリード役を担うことになるのです。

（３）モラル・アクティブ・ラーニングの提唱

そして、これらの資質・能力を育成するためには、アクティブ・ラーニングが必要だとされます。既存の知識や技能を使っていろいろな課題に対峙し、みんなが一緒になって思考力・判断力・表現力を発揮しながら対応することで、新たな知識や技能を身に付けていくことが求められます。そのこと自体がアクティブ・ラーニングであるにとらえられます。つまり、アクティブ・ラーニングは、しっかりとした知識や技能を身に付けるとともに、直面する具体的な課題や問題に対して、それぞれが身に付けている知識や技能を駆使し、協働しながら追求し、よりよい生き方や社会づくりへとつなげていく学びであるということが出来ます。

では、何をアクティブにするのか。大きく３つを押さえる必要があります。

第1は、心です。感動したり、共感したり、鼓舞されたりして、心の動きを力動化することによって、学びが一層力動的になっていきます。それらの根幹にあるのが道徳性です。つまり、三つ目の柱とする「学びの向かう方向」は人間としてよりよく生きることなのです。

第2は、頭です。思考力、判断力、表現力など、頭を活性化させることによってより力動的な学びが起こります。

第3は、体です。実際に体を動かすことで学びが力動化します。体験したり行動に移したりすることによって学びが主体化され、さらに内面と響き合うことによって習慣化されていきます。

アクティブ・ラーニングを方法ととらえ、体験的な学習や問題解決的な学習が強調されますが、体が動く、頭が動く学びと同時に、心が動く学びを考えていくことが大切なのです。

道徳教育におけるアクティブ・ラーニングにおいては、「心が動く学び」を中心に置いて「頭が動く学び」と「体が動く学び」を力動化させていくのです。そのことによって人間としての自分らしい生き方を求めているアクティブ・ラーニングが具体化します。

そのことをより明確にするために、モラル・アクティブ・ラーニングを提唱します。認知的側面、情意的側面、行動的側面をトータルにとらえて、「特別の教科 道徳」を要として子どもたち自身が主体的・協働的に道徳学習を組み立て、取り組み、日常化・習慣化する学びの提案です。

2 「考え、対話し、自己の生き方を深める」道徳授業の工夫

では、道徳教育の要となる「特別の教科 道徳」は、どのように改善していけばよいのでしょうか。一言でいえば、「考え、対話し、自己の生き方を深める」授業が重要です。それは、道徳性の育成にかかわってアクティブな学びができる授業ということになります。具体的には「自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見つけたりすることができるよう工夫する」、「問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れる」などが学習指導要領に示されています。

中教審答申では、質の高い多様な指導方法の例として、①読み物教材の登場人物への

自我関与が中心の学習、②問題解決的な学習、③道徳的行為に関する体験的な学習が提案されています。これらは独立しているのではなく、それぞれの要素が組み合わせたり、かかわりあったりして授業が展開されます。その場合、主にどこに力点を置くかで別れると言えます。

これらの授業の工夫によって、道徳の授業をアクティブ・ラーニング化しようとするのですが、①は主に心のアクティブ化を、②は主に頭のアクティブ化を、③は主に体のアクティブ化を目指しているととらえられます。それらが統合されることによって、モラル・アクティブ・ラーナーを育てていくことができるといえます。

それらの趣旨を理解し、具体的に取り組む必要があります。そのポイントを見ていきます。

（１） 道徳的価値に照らして自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える工夫をするー自我関与的思考を深めるー

まず、「特別の教科 道徳」の目標にある、道徳的価値の理解を深める、道徳的価値に照らして自己を見つめる、道徳的価値に照らして物事を多面的・多角的に考える、という3つを踏まえた授業を考えることが大切です。そのためには、特に次の5点を押さえた授業を工夫したいです。

第1は、多様に心が動くようにすることです。道徳の授業は、心と心の響き合いをベースに取り組む必要があります。教材を通して、問いかけ(発問)を通して、話し合いを通して、活動を通して、心が動くようにすることが大切です。

第2は、心が動くおおもとを押さえる（どうしてそのように感じたのか等）ことです。授業においては、道徳的価値について深く考えられるようにします。そのためには、自分自身が一番心を動かしたところを、話し合ったり考えたりすることによって道徳的価値についての理解を深めることができます。

第3は、状況について(背景も含めて)道徳的価値に照らして多様に考えることです。話題にしていることがどのような状況の下で起こっているのかについて、道徳的価値とかかわらせてとらえられるようにします。そして、どうすれば解決するかを念頭におきながら考えます。

第4は、その視点から自己や自分の生活や社会を見つめて自己評価を行い、課題を見出せるようにすることです。教材を基にした話し合いや思考を通して、道徳的価値について

の理解を深め、その視点から自分を見つめることが大切です。自己を見つめるということが自分の価値観や生き方のみならず、現実の生活における取組へと関心が向くようにします。

そして、第5に自己課題を事後につなげていけるようにすることです。終末段階で自己課題をもつだけでなく、そこから事後に課題追求へと動き出せるようにすることが重要です。たとえば、授業で使った資料や教具などを掲示して、朝の会や帰りの会などで話題にします。また学級活動や総合的な学習の時間とつなげていきます。家庭での学習や自己学習を促していく(時には宿題を課す)といったことも考えられます。

(2) 問題解決的な授業を工夫する—問題解決力を育てる—

問題解決的な学習が求められるのは、具体的な道徳的問題や課題に主体的にかかわり克服していける力を身につけることが必要なためです。問題解決力を身につけるには、「どうすればよいのか」という方法知に関する思考と同時に、「なぜそうなったのか」「どうしてそのようなことが起こったのか」といった原因や背景に関する追究(本質知)が重要です。それは、人間理解や価値理解を深めることにもなるし、多様な問題解決方法が考えられるようにもなります。この二つをどのように結び付けていくかが大きな課題です。2時間続きの授業をすとか、1時間を道徳の授業とし、その後の1時間を学級活動として時間を確保し、その2時間で道徳学習を充実させるといった取組もできます。さらに、総合的な学習の時間と連携させて、もっとダイナミックな問題解決的な学習、いわゆるプロジェクト型道徳学習を工夫する必要があります。

(3) 体験的な授業を工夫する—実感し実践へとつなぐ—

体験的な学習が必要だと言われる大きな理由は、日常生活における道徳的实践へとつなげるためです。自律性と道徳的实践をいかに結び付けていくかが課題となります。体験的な授業のキーワードは「実感する」です。考えたり想像したりすることと、様々な感覚器官を媒介として実感することをつなげることによって、日常生活や様々な学習活動の中で実践していこうとする意識を高めたり、自然と実践に移したりできるようにしようとしています。

具体的には、役割演技や動作化を取り入れた授業、学習課題を現実生活の中で実際に観察して見つけてくることから始める授業、課題として実際の生活の中で実感したことを

授業を通して追求していく授業、具体的な行動とかかわらせて考える授業、教材に描かれる実物に触れたり、本人に会ったりする授業などが考えられます。また、道徳の授業で内面を高めて、授業後に生活や学習活動の中で実感できるようにする指導計画も、積極的に考えていく必要があります。

（４）成長を認め励ます評価を工夫するー評価観の１８０度の転換ー

「「特別の教科 道徳」の評価については、「数値などによる評価は行わない」で「道徳性にかかわる成長の様子を継続的に把握し」評価することを求めています。つまり、個人内評価で、一人一人の子どもたちの成長を見取り、それを伝えていくのです。このような評価は、従来の評価観を１８０度転換するものです。つまり、教えたことをどの程度理解し身に付けたかではなく、子どもたちが本来もっているよりよく生きようとする心をいかに目覚めさせ、引き出したかを中心とする評価観です。

それは、子どもたち自身が自己評価力を高め、課題を見出し、自己指導できる力を育成することとつながります。そのためには、子どもたちが学習記録を残せるようにする必要があります。道徳の授業と授業後の取組も記入できる道徳ノートをもち、子どもたち自身が年間を通して自己の成長を実感し、自己課題を見出し取り組んでいくようになることが強く求められます。

３ 総合単元的道徳学習（総合道徳学習）を構想し取り組む

このような「特別の教科 道徳」を要としたモラル・アクティブ・ラーニングをさらに発展させるためには、関連する教育活動や日常生活等と密接に関連させた道徳学習を計画していく必要があります。それが総合単元的道徳学習（総合道徳学習）です。このような道徳学習が学校のカリキュラム（カリキュラム・マネジメント）の中核に位置付けられることによって、全教育活動や日常生活を通してモラル・アクティブ・ラーニングが活性化していくといえます。

（１）総合単元的道徳学習を構想する基本的な押さえ

①重点目標や社会的課題に対して

まず、重点目標や社会的課題などに関して関連する教育活動や日常生活などを密接に関連した指導計画を総合単元的道徳学習として計画し、取り組めるようにします。

② 1～2ヶ月くらいで

期間は1～2ヶ月くらいのスパンで考えます。道徳の授業を中核に関係する学習活動や体験、日常生活などを響き合わせられるように計画します。

③ 子どもの意識の連続性を考え道徳授業が要の役割を果たせるようにする

総合単元のねらいに関して深めたり広げたりできるよう工夫します。そして、道徳の授業が価値の自覚を深める要の役割が果たせるようにします。

④ 多面的評価の工夫

特に「行動の記録」にあげられる項目は、内面と行動とが結びついた指導が求められます。総合単元的道徳学習においては、認知的側面、情意的側面、行動的側面についての評価を総合的に考えた指導が可能となります。

⑤ 家庭や地域との連携

先生と子どもたちが日常生活をベースとして、家庭や地域とも連携して取り組んでいくことができるようにします。

⑥ 年間指導計画に位置付ける

それらを、「特別の教科 道徳」の年間指導計画に位置付け、計画的に実行できるようにします。

(2) 総合単元的道徳学習の具体的計画づくりの基本的押さえ

① 総合単元的学習名

具体的に全体を通してどこまで取り組みたいかが分かるようにしておくといいです。例えば「思いやりの心をもって行動できるようになろう」など。

② 全体のねらい（指導のポイント）

総合単元的道徳学習の計画全体を通してどのようなことを指導するのかについて、そのポイントを3～5つくらい書いておきます。例えば「思いやりの心をもって行動できるようになろう」という目標であれば、

- 1 思いやりの心は相手の気持ちを考えることと勇気をもつことによって相手に伝えることができることを学ぶ（「特別の教科 道徳」）
- 2 周りの人々は、思いやりの心についてどのように考えているのかを取材を通して学ぶ

(総合的な学習の時間)

- 3 思いやりの心をどのようにすれば相手に伝わるのかについてエクササイズを通して学ぶ(学級活動)
- 4 国語の教材を通して思いやりの心について学ぶ(国語科)
- 5 思いやりの心を相手に伝えるにはどうすればよいのかについてポスター作りで学ぶ(図画工作科)

③ 各教科などにおける道徳教育を多用に工夫する

ねらいにかかわる気づきや考え、興味や関心などが連続的に発展するようにします。各教育活動の特質や学習内容を考慮して、調べる学習、深く考える学習、道徳的価値の自覚を深める学習、実感する学習、表現する学習、体験する学習、実践する学習などを組み合わせ響き合わせていきます。

④ 子どもの意識を連続的にする日常生活での取組を工夫する

例えば、ねらいとかかわらせて、朝の会や帰りの会、掲示、家庭や地域での学びなどを工夫します。さらに、朝読書、1分間スピーチ、学級新聞づくり、新聞記事などの紹介、ドラマや映画の紹介、本の紹介、体験の紹介や問題・課題の投げかけなどを計画します。

⑤ 子どもの意識の連続性を考え道徳の授業が要の役割を果たすようにする

全体を通してどのように子どもの意識を深め広げていくのかについて、「子どもの心の動き」という欄を設けて記入します。「子どもの心の動き」を追いながら、総合単元のねらいに関して意識が深められたり広げられたりするように計画の全体を見直していきます。そして、「特別の教科 道徳」が価値の自覚を深める要の役割が果たしているかを確認します。

⑥ 子どもと一緒に道徳学習を深めていく(オリエンテーションをする)

最初は教師が概要を示しますが、それをもとにみんなで話し合いながら計画を創っていきます。個人目標も記入できるようにします。また、家族にも参加してもらえるように、簡単な図式化したものを家庭にも配り、貼ってもらうと同時に家庭でも目標も記入してもらうようにします。

⑦ 総合単元的道徳学習用のノートを創る

最初のページに計画表を貼り、この学習のねらいと留意事項、個人的課題なども書けるようにします。また、思ったことや考えたこと、感じたこと、取り組んだことなどを自由に書けるようにしておきます。そして、教師が必ず見て、励ましやアドバイスを与えます。

またいろんな場面で書くように促します。了解を得てみんなに紹介もします。ノートを一つの作品づくりという形で取り組み、一生の宝物として大切に残していけるようにします。

⑧ 評価と指導の一体化を図った総合単元的道德学習を工夫する

道德教育においては、評価が常に課題になり、長期的・総合的視点からの評価と指導が必要になります。総合単元的道德学習は、その課題に正面から応えることができます。例えば、一連の道德学習における子どもたちの心の動きをよりダイナミックにするためのポイントを押さえ、それを評価基準とします。計画表にいくつかの評価欄を設け、課題をその都度押さえて次のステップの学習を工夫します。単元のくくりが終わった時点で、全体のねらいに対する一人一人の状態を評価します。個人と同時に学級全体の雰囲気なども評価し課題を押さえて日々の指導につなぐようにします。

⑨ 学級の状態に応じた総合単元的道德学習を工夫する

総合単元的道德学習は学級経営と密接にかかわります。したがって、学級の状態に応じて、効果的な総合単元的道德学習を提案していく必要があります。日常的なかかわり、学級での豊かな体験、家庭との連携などを重視した、学級経営的視点を踏まえた総合単元的道德学習を工夫します。

⑩ 一人一人の総合単元的道德学習へと発展させる工夫をする

各自が自分の課題を追究できるように、子どもたちが計画できる部分を多く盛り込んだ総合単元的道德学習を工夫します。共通的学习部分と個別的学习部分をミックスさせながら、子どもたち自身が道德学習を発展させられるようにします。